第５章　スタートカリキュラム

１　スタートカリキュラム

スタートカリキュラムとは、幼児教育から小学校教育への円滑な接続を大切にした第１学年入学当初のカリキュラムです。

特に，小学校入学当初においては，幼児期における遊びを通した総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行し，主体的に自己を発揮しながらより自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすること。その際，生活科を中心とした合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。

（小学校学習指導要領生活）

平成27年１月に発行された「スタートカリキュラム　スタートブック」（文部科学省）には、「小学校に入学した子供が、幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラムです」と書かれています。

２　横浜版スタートカリキュラム

横浜市には、平成29年４月１日現在、249の私立幼稚園、32の認定こども園、80の市立保育所、640の認可保育所（特定地域型保育事業を除く）があります。この他にも認可外保育所や幼児教育施設があり、保育や教育の環境や内容は、多様なものとなっています。子どもの家庭環境も多様化、複雑化しており、様々な点で支援や配慮を必要とする子どもが年々増加しています。

多様な環境で育ってきた子どもたちが、スムーズに学校生活に適応し、教科等の学習に円滑に接続できるように、横浜市では、平成23年度に「横浜版接続期カリキュラム　育ちと学びをつなぐ」を策定し、全ての市立学校でスタートカリキュラムに取り組んできました。

（１）横浜版スタートカリキュラムで育てたい子どもの姿

①　安心して自分を発揮し、やってみたいことに向かってがんばる子ども
②　新しい学級や学校のルールを受け入れ、学級の一員として協同的に活動できる子ども
③　幼児期の学びを生かして、自己肯定感を高め、主体的に学習に取り組む子ども

※横浜版スタートカリキュラムでは、幼児期の学びの特性を踏まえ、幼児教育からの接続という観点から、「協同」という表記にしています。

（２）横浜版スタートカリキュラムのねらい

①　安心して学校生活をスタートし、集団の中で自己発揮できるようにします。
②　学級の一員としての自覚をもって、協同的に活動することができるようにします。
③　幼児期に身に付けた力を発揮して、各教科等の学習に円滑に移行し、主体的に学ぶことができるようにします。

①安心して学校生活をスタートし、集団の中で自己発揮できるようにします

横浜市のほとんどの学校では、20～30の園から子どもが入学してきます。多いところでは40園以上という学校もあります。１園から複数の友達と共に入学する子もいれば、たった一人で入学する子もいます。園で慣れ親しんだ友達や先生と別れ、新しい友達や先生と出会う学校生活の始まりは、期待と不安、緊張などの入り混じった気持ちで迎えることでしょう。

そこで、スタートカリキュラムでは、まず一人ひとりが新しい人間関係を築くことができるように、心をほぐし安心感がもてるようにします。緊張や不安を安心に変え、新しい友達関係を築くことで、子どもに居場所ができ、「明日も学校に行きたい」と思えるようになるのです。

②学級の一員としての自覚をもって、協同的に活動することができるようにします

新たな人間関係を築き、学級集団を形成していくためには、園で身に付けた力を見とる必要があります。個人差はありますが、子どもは園での協同的な遊びや体験を通して、「協力して粘り強く取り組む力」「相手と折り合いをつける力」「ルールを自分たちでつくる力」などを身に付けています。

スタートカリキュラムでは、集団での遊びや学級での活動を通して、友達と一緒に活動する楽しさや、共通の目的に向かって協力したり努力したりすることの大切さを感じることができるようにします。同時に、集団で活動するためのきまりやルールについて考えたり、話し合ったりする機会をつくり、子どもが納得して受け入れられるようにします。

このように早い段階で、協同の遊びや活動に取り組むことで、秩序ある学級集団を形成し、集団の一員としての自覚をもつことができるようにします。

③幼児期に身に付けた力を発揮して、各教科等の学習に円滑に移行し、主体的に学ぶことができるようにします

子どもは、園での生活や遊びを通してたくさんの知識や技能を獲得しています。また、試し、工夫し、粘り強く取り組み、新しい遊びや活動、作品を創り出してきています。こうした力が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に表れています。

スタートカリキュラムにおいて、こうした姿を生かす活動や学習を意図的に設定することで、子どもたちは、達成感や満足感を味わい、「やればできる」という感覚をつかみ、自信をもって学校生活を始めることができます。そして、友達や先生から認められることによって自己肯定感が高まり、さらに成長していくことができるのです。

（3）3つの学びの時間帯

スタートカリキュラムのねらいを達成するために、次のような3つの学びの時間帯で単元や学習活動を配列しています。

なかよしタイム	一人ひとりが安心感をもち、担任や友達に慣れ、新しい人間関係を築いていく時間です。自分の居場所を学級の中に見出し、徐々に集団の一員としての所属意識をもち、学校生活の基盤である学級で、安心して自己発揮できるように工夫していきます。
わくわくタイム	幼児期に身に付けた力を発揮し、主体的な学びをつくっていく時間です。生活科を中心として、様々な教科等と合科・関連を図り、教科学習に円滑に移行していくための時間として位置付けています。幼児期における遊びを通した総合的な学びを生かし、子どもの思いや願いに沿った学習や、具体的な活動や体験をきっかけにして各教科等につなげる学習を大切にすることで、主体的に学ぶ意欲を高めます。
ぐんぐんタイム	わくわくタイムやなかよしタイム、日常の生活の中で子どもが示した興味や関心をきっかけに、教科等の学習へ徐々に移行し、教科等特有の学び方や見方・考え方を身に付けていく時間です。

子どもたちの安心や学校生活への適応、学習への興味・関心等を考慮し、時期とともに「なかよしタイム」「わくわくタイム」「ぐんぐんタイム」の配分を考えます。

４月は安心感をもち早く学校に慣れるようにするために、「なかよしタイム」を設定します。実施期間は、子どもの実態によって異なりますが、これまで実践してきた学校の例を見ると、２週目、３週目と時間を減らし、４月中で終了している学校が多いです。５月の連休明けに、安定のために数日行ったという例もあります。同じ学校でも、年度によって期間が違うというケースもあります。いずれにしても子どもの内面をしっかり読み取りながら設定していくことが重要です。

学校や子どもの実態に合わせ、柔軟に時間を配分しましょう。

<table>
<tr><th></th><th>４月第１週</th><th>４月第２週</th><th>４月第３週</th><th>４月第４週</th><th>５月以降</th></tr>
<tr><td>朝の時間</td><td rowspan="3">なかよしタイム</td><td rowspan="2">なかよしタイム</td><td rowspan="2">なかよしタイム</td><td rowspan="2">なかよしタイム</td><td>なかよしタイム</td></tr>
<tr><td>１校時</td><td rowspan="3">わくわくタイム</td></tr>
<tr><td>２校時</td><td rowspan="2">わくわくタイム</td><td rowspan="2">わくわくタイム</td><td rowspan="2">わくわくタイム</td></tr>
<tr><td>３校時</td><td rowspan="2">わくわくタイム</td><td rowspan="3">ぐんぐんタイム</td></tr>
<tr><td>４校時</td><td>ぐんぐんタイム</td><td rowspan="2">ぐんぐんタイム</td><td rowspan="2">ぐんぐんタイム</td><td rowspan="2">ぐんぐんタイム</td></tr>
<tr><td>５校時</td><td></td></tr>
</table>

３つの学びの時間帯　配分例

３　スタートカリキュラム編成の留意点

（１）幼児期の育ちと学びを生かす

①幼稚園･保育園･認定こども園等での経験や学び、保育者の指導を参考にします

この時期の子どもの発達の特性を理解するとともに、特性に応じた指導方法を把握しカリキュラムに生かします。そのためには、近隣の園を参観したり、保育者に話を聞いたりして、園でのカリキュラムや生活の流れ、指導の実際を知り、カリキュラム作成の参考にしましょう。

②園の先生と合同の研究会をもち、カリキュラムを編成します

カリキュラム編成にあたっては、近隣の園の保育者等と合同の研究会をもち、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共通理解したり、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムとのつながりを考えたりすることが大切です。職員同士が信頼関係をつくり、互いの子ども観・指導観を共有しながら、連続性・一貫性をもったカリキュラムを編成していきましょう。

（第７章　接続期カリキュラムを支える環境　１幼保小をつなぐ職員連携　P82参照）

（２）生活科を中心とした合科的・関連的な指導を工夫する

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（P19参照）を踏まえ、生活科を中心として他教科等と合科的･関連的な指導を行ったり、子どもの生活とつながる学習活動を取り入れたりしましょう。

生活科での学習活動が他教科等での題材となったり、生活科で身に付けた資質・能力が生活科において発揮されたりするなど、一層の学習効果が期待されます。

合科的な指導…… 各教科のねらいをより効果的に実現するための指導方法の一つで、単元又は１コマの時間の中で、複数の教科の目標や内容を組み合わせて、学習活動を展開するもの。

関連的な指導…… 教科等別に指導するに当たって、各教科等の指導内容の関連を検討し、指導の時期や指導の方法などについて相互の関連を考慮して指導するもの。

（小学校学習指導要領解説生活編）

（3）生活に即した学びを構成する

この時期の子どもは、生活が丸ごと学習環境になります。生活の中から生まれる興味・関心や思い・願いをきっかけにすることで、子どもたちは主体的に活動を展開していきます。教師が一方的に選び与える活動ではなく、子どもたちのつぶやきや所作から学習材になりそうなものや活動の始まりになりそうなことを捉えて活動を立ち上げたり、教師のしかけで子どもの興味・関心を引き出したりしながら、柔軟な発想で授業を構想しましょう。

子どもの興味・関心を紡いで活動をつくっていくと、子どもの意欲は膨らみ、主体的な活動になっていきます。教師が、「これから学校探検をしますよ」「〇〇に行きましょう」と決めたり、２年生に案内してもらったりする受身の活動ではなく、子どもたちが「何かな」「行ってみたいな」「どうなっているのかな」と興味・関心をもったことを入り口にすることが、これから始まる学校生活に対して、わくわくするような期待をもつことに、さらには人やものごとに意欲的・主体的に関わることにつながっていきます。

※事例の右肩の丸は、指導をする際に踏まえる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の例です。

自立心　社会生活との関わり

事例　1年生「こんなときどうするの？」

連休明けの朝、Ａさんはトイレの便器にトイレットペーパーを丸ごと落としてしまいました。「たいへんなことをしちゃった。どうしよう…」と泣きながら教室に戻ったＡさん。その姿を見て、「こんなときはどうしたらいいか、みんなで解決しよう」とクラスみんなで知恵を絞りました。「この前、用務員のＢさんがトイレの前を掃除してた！」というＣさんのつぶやきを聞いて、すぐに用務員のＢさんにお願いに行ってみることにしました。

Ｂさんは、快く受けてくれ、さらにトイレ掃除の仕事をしていることも教えてくれました。

「Ｂさんは、この間ブドウ棚の草刈りもしていたよ」「いろんな仕事をしてる。他にもやっているのかな」。Ｂさんと出会ったことで、次々に知りたいことが出てきました。そこで、「Ｂさんのことを、もっと知りたい」という子どもの思いを優先し、時間割を変更して、Ｂさん探検をすることにしました。赤白帽子を白にして石ころに変身する子、校舎の陰からこっそりのぞき見する子など、それぞれの方法で観察しました。やがてＢさんに見つかってしまいましたが、「今度は、ごみステーションに行くよ」と言うのでついて行き、ごみの量を量ったり、分別して分類したりする仕事を見せてもらいました。教室に戻ってからは、ごみの捨て方を振り返り、「紙の無駄使いはやめよう」「きちんと分別して、Ｂさんの仕事を楽にしよう」と気をつけるようになりました。

（4）弾力的に時間割を設定する

入学当初の子どもの発達特性に配慮し、10分から15分程度の短い時間で時間割を設定したり、子どもが自らの思いや願いの実現に向けた活動の時間を確保するために60分から90分を単位とした学習活動を時間割に位置付けたりするなど、弾力的に運用していきます。時間割に子どもを合わせるのではなく、子どもの実態に合わせて時間割を柔軟に組み替えていきます。

また、幼児期の生活リズムや一日の過ごし方にも配慮します。例えば、朝の会から１時間目を連続した時間として設定し、幼児期に親しんできた手遊びや歌、リズムに乗って体を動かすことや絵本の読み聞かせなどを行うことは、小学校生活への段差を低くし、安心して楽しい気持ちで一日をスタートすることにつながります。

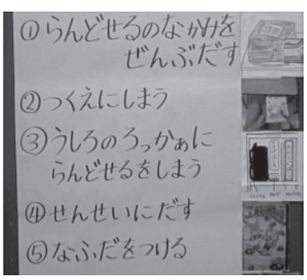
（「なかよしタイム」Ｐ56参照）

（5）学習環境を工夫する

幼児教育は、「環境を通して行う教育」を基本としています。保育者に支えられながら子どもが自分の力で生活を創っていけるよう環境構成されています。小学校においても、一人ひとりが安心感をもち、自分の力で生活や学習ができるように、学習環境を整えていきます。とはいえ、学級は様々な園から入学してきた子ども、様々な個性や特性をもった子どもが集っていますから、どの子どもにとっても安心して生活や学習ができるよう環境を工夫することが重要です。

視覚に訴える表示で 分かる・できる

指示がなくても自分の力で取り組めるように、見れば分かる、できるようにするための支援です。特に、一斉指導場面が増えてくると、視覚優位の子どもたちの困り感は大きくなります。言葉で説明するだけでなく、文字や図、写真などを掲示することは、子どもの理解を助けます。また、1年生の目の高さで校内を回ってみると、表示が高いことに気付きます。特に、1年生の生活に密接な教室やトイレの表示などは高さの見直しが必要です。



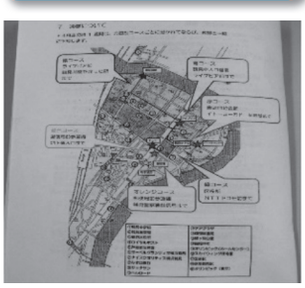
作業の手順

提出場所

名札置き場

机の中の使い方

靴脱ぎ場

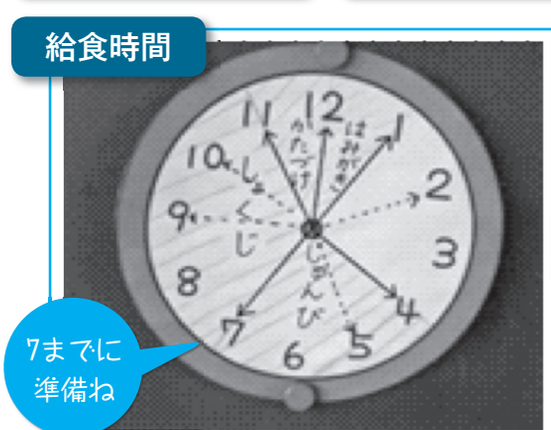


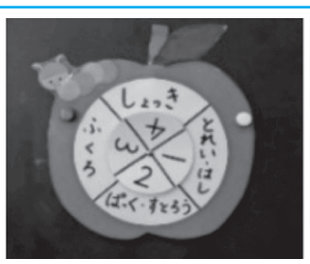
色別下校コース

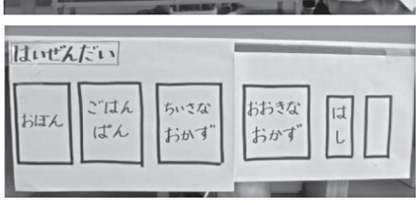
下校コース別シール

目の高さに表示

給食時間







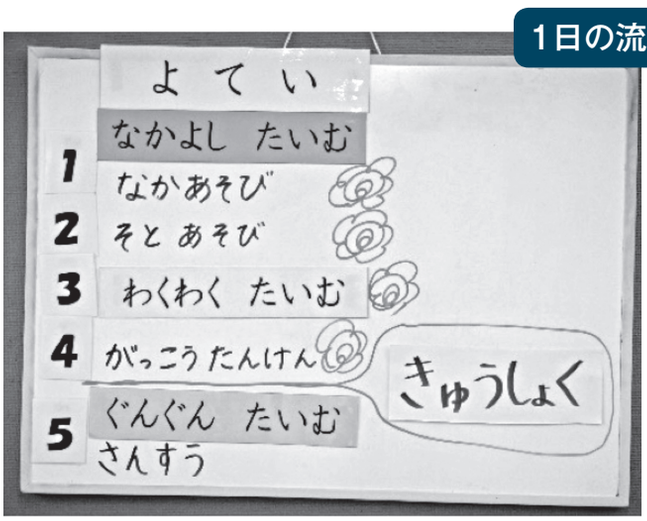
- 給食の時間の使い方
- 給食当番
- 配膳台の使い方

分かりやすい板書で見通しをもつ

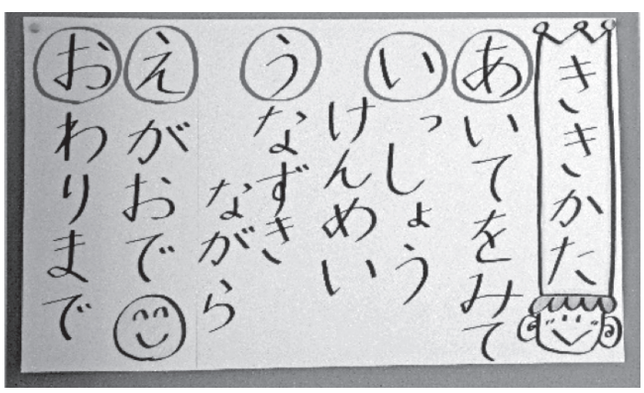
板書は、視覚に直接訴えるため、活動への理解を深めます。教師の指示がなくても、自分で時計を見たり活動の仕方を考えたりして生活できるようにします。

１日の予定、活動のめあて、活動の仕方、手順、机の上に出す物、持ち物等はいつも決まった場所に表示しましょう。活動が変更される場合は、事前に予告したり何がどう変更されるのかを分かりやすく示したりすることが大切です。

1日の流れ



朝の支度



集中しやすい教室環境

教室の前面はシンプルにし、子どもたちの集中力を高めます。教卓やオルガンの上など子どもの目に入る所は、できるだけ物を置かないようにし、常にきちんと整理をしておきます。その授業で使わない資料は下ろし、作品等は教室背面に掲示します。

教室前面

教室背面

安心できるスペースづくり

学習スペースを離れ、リラックスできる場所を教室内外に確保します。子ども同士自由に遊ぶ場が保障されることによって、緊張がほぐれ、新しい友達とも仲よくなります。

使うときのきまりは、子どもたちと話し合って決め、守れるようにします。

1年生広場

読書コーナー

集団学習が苦手な子どもには、一人で落ち着ける場所を用意します。場合によっては、パーテーションも活用します。気持ちが落ち着いたら席に戻る約束をしておきます。

扉が低い園のトイレに比べ、閉ざされた空間である小学校のトイレに不安になる子どももいます。かわいく飾るなどすると、不安が和らぐようです。

リラックスできる場所

決まった場所に片付ける

幼児期に身に付けた「片付け」の習慣を、小学校でもしっかりと受け継ぎたいものです。「どこ」に「何」を「どのように」片付けるのか、明示しておくことによって子どもの力できちんと活動することでき、自分の行動に責任をもつことにもなります。

活動によって机の配置をかえる

多くの園では、子どもたちは４～６人のグループ机で 生活をしています。入学当初よりこの形を取り入れることによって安心できるので、友達との距離が縮まり、話合い活動が充実していきます。

机の配置

4　スタートカリキュラムの編成

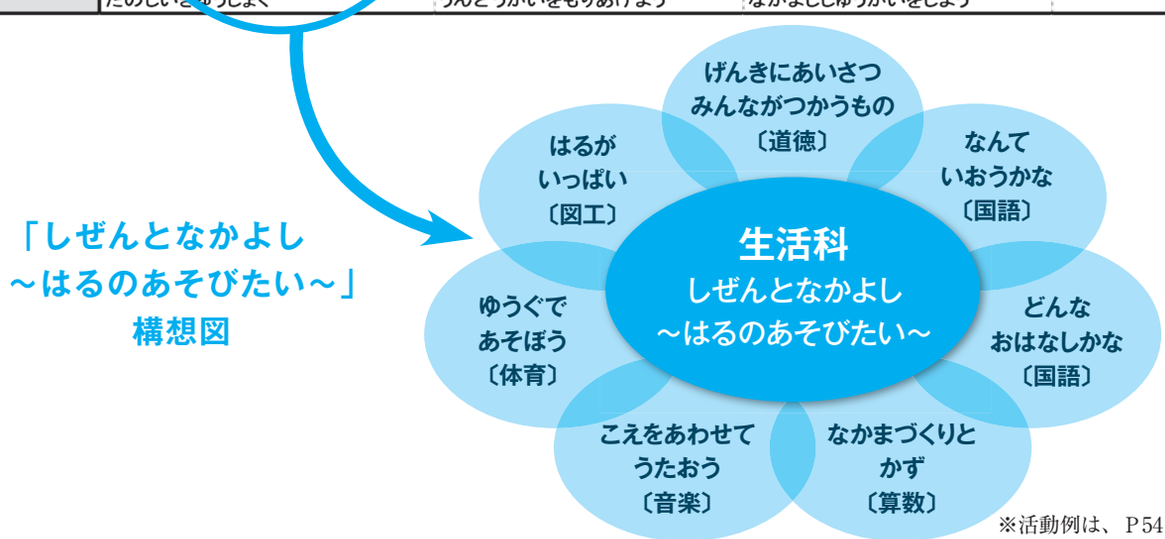
（1）生活科を中心に合科･関連を考える

子どもの生活を基盤とし、興味や関心をもとに具体的な体験を通して学ぶ生活科は、遊びを通して学ぶ幼児教育からの円滑な接続を図る上で、非常に重要な役割を果たします。子どもたちの発達の特性や幼児期からの学びと育ちを踏まえ、実態を把握した上で、生活科を中心として各教科等と合科的・関連的な指導ができるようにします。

スタートカリキュラムの作成においては、生活科と各教科等の学習がどのように関連付いているのかを意識した上で、子どもの興味･関心、思いや願いを生かした活動をつくることが大切です。そのためには、年間指導計画から、合科的・関連的に指導できそうなものをあらかじめピックアップし、教科等の内容やねらいを把握しておくことが必要です。

第１学年指導計画

	４月	５月	６月	７月
学校行事 児童会活動	入学式 対面式	運動会	プール開き	
生活科	しぜんとなかよし　内容(4)(5)(6)(8) ～はるのあそびたい～		～なつのあそびたい～	
	がっこうだいすき　わくわくたんけんたい 内容(1)(8)		つうがくろ　あんぜんたい 内容(1)(8)	
		はないっぱいになあれ　内容(7)(8)		
	げんきにあいさつ　内容(7)(8)			
国語	あさ　　んていおうかな どんなおはなしかな こえのおおきさどうするの どうぞよろしく うたにあわせてあいうえお ことばをつくろう ほんはともだち	えをみてはなそう かきとかぎ あさのおひさま はなのみち ぶんをつくろう わ　ことねっこ わけをはなそう	おばさんとおばあさん くちばし おもちやとおもちゃ おもいだしてはなそう あいうえおであそぼう おおきくなった おむすびころりん	たからものをおし はをへをつかおう すきなことなあに おおきなかぶ こんなことをした
算数	なかまづくりとかず	なんばんめ いくつといくつ	あわせていくつ のこりはいくつ	10よりおおきい
音楽	こえをあわせてうたおう おとあそびをしよう わらべうたやあそびうたにしたしもう	こえをあわせてうたおう おとあそびをしよう	きょくにあったうたごえでうたおう おとあそびをしよう	きょくにあった
図工	みてみて、いっぱいつくったよ 「じぶんマーク」でみんなともだち はるがいっぱい	しぜんとなかよし ひかりのくにのなかまたち クルクルぐるーり	しぜんとなかよし いろいろならべて	しぜんとなかよし チョッキンパッ さわって、はって
体育	からだほぐし おにあそび ゆうぐであそぼう	かけっこ リズムにあわせて とんだりはねたり	マットあそび みずあそび	みずあそび
道徳	げんきにあいさつ みんながつかうもの あんぜんなせいかつ	いのちのあたたかさ ともだちとなかよく がっこうだいすき	まちのひとのあたたかさ わがままをしないで けんこうなせいかつ	じぶんでやるよ かわいいね みんななかよし
特活	なかよしいっぱい あんぜんなとうげこう たのしいゆうしょく	どうぞよろしく おしごとをみつけよう うんどうかいをもりあげよう	はみがきじょうずかな おしごとたのしいな なかよししゅうかいをしよう	なつやすみを



※活動例は、P54　参照

例として、生活科の単元「しぜんとなかよし～はるのあそびたい～」を中心に、他教科等との関連を構想してみました。子どもたちは、「身近な自然（春）に目を向け、興味や関心をもって、観察したり遊んだりするのではないか」と予想し、計画を立てます。

「春」を学習材として生活科を中心に置き、それぞれの教科の目標や内容を考えて、各教科等の学習を位置付けていきました。

子どもが、「見つけた春や遊んだことから話題を決めて友達に伝えたり、相手の話を聞いて感想をもったりする」ことは、国語の学習「なんていおうかな」として指導できるでしょうし、「見つけた春や遊んだことを、身近な材料や用具を使って、自分の気持ちや感じたことを生かして絵に表す」ことは、図工の学習「はるがいっぱい」として指導できるでしょう。他の教科等でも「春」を学習材にして指導できそうなものを、洗い出しておきます。

このように、指導計画を基に各教科等の目標や内容を把握しておくことで、子どものつぶやきや姿をきっかけとして、合科的・関連的な指導に結びつけることが容易になります。

（2）３つの学びの時間帯で週案を考える

毎日同じ活動を繰り返すことが安心につながります。何をやるかがわかり見通しがもてると、子どもは安心して意欲的に活動に取り組むことができます。特に第１週は、心をほぐすこと、新しい環境に慣れて友達や学校職員と関係を築くことを目標にします。そのためにも、なかよしタイムから一日を始め、園で慣れ親しんだ歌や読み聞かせ等の活動を中心に構成しましょう。

わくわくタイムは、生活科の単元「しぜんとなかよし～はるのあそびたい～」を中心に、各教科等と合科的・関連的に指導します。校庭や通学路は、春の自然がいっぱいです。子どもは春をたくさん見つけることでしょう。その中で遊ぶ楽しさを心と体で感じてほしいものです。子どもの発見や気付きの中には教科等の目標に迫れるものがたくさんあります。つぶやきに耳を傾け、姿を追いましょう。書いてみたい、数えてみたいといった知的興味は意欲的に学ぶチャンスです。どの教科等の学びにつなぐことができるか、合科・関連を図るチャンスでもあります。

◆時間割の上での時間配当

春を見つけて遊ぶ子どもの意識に教科の区別はありません。しかしながら、教師は、各教科等の目標や内容をしっかり把握した上で指導に当たります。次ページの週案の例では、時間割を弾力的に扱えるよう、15分ずつのモジュールで区切り、活動の左側にどの教科の時間として扱ったかがわかるようにしました。

なかよしタイムの時間は、教科等の目標や内容を実現するものであれば、その教科として時間を計上しますが、そうでない場合やはっきりと教科として区別が難しい場合は、授業時数以外の教育活動の時間として計上します。（文部科学省「スタートカリキュラム　スタートブック」）ここでは、便宜上、なかよしタイムの中の授業時数以外の教育活動の時間をなかよしタイムの「な」として週案に表記しました。（週案P54参照）

なかよしタイムの呼び方は、学校によって様々です。「にこにこの時間」や「（学校名）タイム」など、各学校で決めた、子どもが親しみやすい名前がよいでしょう。

時間の配当 表記例

な……	授業時数以外
国……	国語
算……	算数
生……	生活
音……	音楽
図……	図工
体……	体育
道……	道徳
学……	学級活動
行……	行事
外……	YICA

３つの学びの時間帯

- なかよしタイム
- わくわくタイム
- ぐんぐんタイム

4月第1週

事例　なかよし①

P57～　事例参照

		第1日目	第2日目	第3日目	第4日目	第5日目
朝の時間			なかよしタイム（好きな遊びをして過ごす）	なかよしタイム　（朝の支度が終わったら、好きな遊びをして過ごす）		
朝の会			朝の会 ・挨拶　・健康観察 ・今日の予定	なかよしタイム 朝の会 （※健康観察など、毎日必ず行うことはパターンとする）	なかよしタイム 朝の会	なかよしタイム 朝の会
1校時	な		なかよく遊ぼう ・遊び歌に親しもう ・どんなお話かな ・声を合わせて歌おう ・挨拶ゲーム	なかよく遊ぼう ・遊び歌に親しもう ・どんなお話かな ・声を合わせて歌おう ・音遊びをしよう ・握手ゲーム	なかよく遊ぼう ・遊び歌に親しもう ・声を合わせて歌おう ・音遊びをしよう ・友達づくりゲーム ・どんなお話かな （※春探しにつながるよう、「春」を題材にした話を選ぶ）	なかよく遊ぼう ・遊び歌に親しもう ・声を合わせて歌おう ・音遊びをしよう ・ことばあそびに親しもう ・どんなお話かな （※「春」を題材にした話や、生き物とのふれあいにつながるような話を選ぶ）
2校時	な		（※1年生が知っている歌や、絵本、遊びなどを中心に選び、心をほぐす）			
3校時	生	入学式 ・入学した喜びと学校生活への期待をもつ。	学校のはてな ・持ってきた荷物を整理しながら、分からないことや不思議に思うことを出し合い、解決する。	春の遊びたい 外で遊ぼう ・やりたいことを選んで遊ぶ。（遊具遊び・砂遊び・鬼遊び等）	春の遊びたい 春を探そう ・校庭の春を探して遊ぶ。 なんて言おうかな ・遊んだことや、見付けたものについて話す。 春がいっぱい ・見付けた春や遊んだことを、パスを使って絵に描く。	春の遊びたい 春を探そう ・春を探して遊ぶ。 ・学校で飼育している動物とふれあう。 カードにかこう ・遊んだことや、見付けたものについて、カードにかく。（「鉛筆つまんで」「足はぺったん」） 声の大きさどうするの
4校時	学	なかよしいっぱい ・学校には、たくさんの頼れる人や友達がいることが分かる。 ・明日の見通しをもつ。	帰りのしたく 安全にかえろう ・下校の準備をする。 ・安全な下校について話し合う。 ・下校班で自己紹介ゲームをする。			

活動例　しぜんとなかよし　～はるのあそびたい～

第4日目の例

《子どもの姿》

なかよしタイムで、「はるがきた」*1 を聞く。

・ぼくも、がまくんやかえるくんみたいに、春探しに行きたいよ。

校庭の春探しに出かける。

・桜の花びらが降ってきた。
・シロツメクサで、指輪を作ろう。
・池の中には何がいるかな？

教室に戻り、校庭で見つけた「春」を、思い思いの言葉で話す。

・赤いチューリップがかわいかったよ。
・桜の花びらを、６枚もキャッチしたよ。

・テントウムシを見つけたよ。

見つけた「はる」を絵に描く。

・いっぱい見つけたよ。いくつ描けるかな。
・ぼくは、○○さんと桜の花びらキャッチしたことを描こう。
・○○さん、一緒に描こうよ。

《教師のかかわり》

○身の回りの春に目を向けられるような話を選んで読み聞かせをする。
【国語「どんな おはなしかな」】

○「春探し」に興味をもった子どものつぶやきを捉えて、全体化する。
○子どもの「やりたい」をできる限り保障する。
【生活「春の遊びたい」】

○子どもの思いやつぶやきを温かく受容する。
【国語「なんていおうかな」】

○チューリップを見つけた子どもの発言を捉えて、みんなで「チューリップ」を歌う。
【音楽「こえをあわせてうたおう」】

○花びらが何枚とれたのかを聞くことで、子どもの「数える」活動に必要感をもたせる。
【算数「なかまづくりとかず」】

○心を開いてのびのびと表現できるようにする。
【図工「はるがいっぱい」】

*1 参考『はるがきた』　アーノルド・ローベル 著　三木卓 翻訳　「ふたりはともだち」文化出版局

４月第2週

事例　ぐんぐん①　　事例　わくわく④

		第6日目	第7日目	第8日目	第9日目	第10日目
朝の時間		なかよしタイム　（朝の支度が終わったら、好きな遊びをして過ごす）				
1校時	音	なかよしタイム 朝の会 なかよく遊ぼう ・声を合わせて歌おう ・どんなお話かな （※「食べ物」を題材にした話を選び、給食につなげる）	なかよしタイム 朝の会 なかよく遊ぼう ・声を合わせて歌おう ・音遊びをしよう ・わらべうたに親しもう ・どんなお話かな 「あいうえおうさま」	朝の会 〈全校集会〉 1年生を迎える会	なかよしタイム 朝の会 なかよく遊ぼう ・声を合わせて歌おう ・どんなお話かな 「ぐりとぐら」	なかよしタイム 朝の会 なかよく遊ぼう ・声を合わせて歌おう ・どんなお話かな
	国					
	国					
2校時	生	わくわく探検隊 お話ししよう ・給食について、知りたいこと、気になることなどを出し合う。 給食室をさがそう ・給食室を探す。 （※栄養職員と出会えるようにしておく） カードにかこう	ひらがなとなかよし ・「何が入るかなゲーム」をし、文字練習と言葉集めをする。	なかよしタイム どんなお話かな 「からすのパンやさん」	ひらがなとなかよし ・「何が入るかなゲーム」をし、文字練習と言葉集めをする。	ひらがなとなかよし ・「何が入るかなゲーム」をし、文字練習と言葉集めをする。
	生					
	生					
3校時	生		わくわく探検隊 探検のルール （「みんなが使うもの」） 〇〇に行こう ・興味や関心を示したところを、みんなで探検する。 （図書館、保健室、音楽室等） カードにかこう お話ししよう	みてみて、いっぱいつくったよ ・からすのパンやさんをお手伝いするために、いろいろなパンを考えて、粘土で作る。 ・友達と「からすのパンやさんごっこ」をする。	わくわく探検隊 探検のルール （「安全な生活」） わくわく探検に行こう ・自分が探検したい所、会いたい人の所へ行く。 カードにかこう お話ししよう	わくわく探検隊 わくわく探検に行こう ・自分が探検したい所、会いたい人の所へ行く。 カードにかこう お話ししよう
	生					
	学	楽しい給食 給食の先生、こんにちは ・栄養職員の話を聞いたり、質問したりする） 給食の準備をしよう ・給食の流れや当番の仕事、配膳の仕方が分かり、やってみる。				
4校時	学					
	学					
5			なかまづくりとかず ・探検で見付けたもので仲間をつくる。 ・1対1対応が分かる。	ひらがなとなかよし ・「何が入るかなゲーム」をし、文字練習と言葉集めをする。	なかまづくりとかず ・「2」のもの集め。 ・「1」のもの集め。	なかまづくりとかず ・「3」のもの集め。 ・「4」のもの集め。
					おにあそび ・歌って踊ろう ・体ほぐしの運動 ・鬼遊び（ぐりとぐら）	「じぶんマーク」で、みんななかよし ・「じぶんマーク」を創る。 ・創ったマークを紹介し合う。

事例　わくわく③

事例　わくわく①

事例　わくわく②

事例　ぐんぐん③　　事例　ぐんぐん②　　事例　わくわく⑤へ

「がっこうだいすき わくわくたんけんたい」構想図（単元例は、P 59～ 参照）

なかよしタイム

一人ひとりが安心感をもち、担任や友達に慣れ、新しい人間関係を築いていく時間

新しい人間関係の中で、安心できる友達の存在は学校への不安を取り除くための大きな要素です。なかよしタイムでは、仲間づくりのゲームやグループでの相談が必要なクイズなどを意図的に取り入れます。その中で、自然と人間関係が築かれ、その後の学級づくりがスムーズになります。自分の居場所を見つけ、安心してクラスで過ごせるという気持ちをもつことは、学習の基盤としてもとても大切です。

登校後の朝の時間

入学前の園生活では、登園時間に幅があります。子どもたちは登園後、身支度を調えてから、自分の好きな遊びをして過ごします。そうした朝の時間の流れを、小学校でも取り入れていくことが安心感につながります。教室や廊下の一角にコーナーを設けたり、生活科室や図書館などの特別教室などが教室の近くにあれば、それらを開放したりすると、子どもたちの活動が広がります。積み木や折り紙などを置いておくことで、自然に友達との関わりが生まれます。決められた活動をさせるのではなく、自分のやりたい遊びを考えたり、選んだりできるようにしましょう。

朝の会～ 1時間目

始業時間になったら、今度は全員でなかよしタイムです。歌や体操、ダンス、手遊び、本の読み聞かせなど、幼児期に親しんできた遊びや活動をすることで、楽しい気持ちで一日をスタートできるようにします。園で経験した活動を設定するのは、子どもが「知っている」「わかる」「できる」と、自信をもって取り組めるからです。歌や体操などを取り入れた活動をする中で、手をつなぐ、タッチする、肩を組むなどの体がふれ合うゲームをしたり、挨拶や掛け声などで声を出したりすることは、子どもの心と体をほぐし、入学当初の不安や緊張の解消につながります。

入学当初に毎日外遊びを取り入れている学校では、体全体を使って十分に遊ぶことで、気持ちが安定し、授業への集中力も高まるという効果が報告されています。食事や睡眠など、生活のリズムを整えるという点でもよい影響があるといえます。

また、集団遊びでは、各園での遊び方やルールの違いを巡ってトラブルが起こることもあります。そうした場面では、「どうしたら楽しく遊べるか」を考えることで、ルールを自分たちでつくり、解決していく力を付けていきます。

「１年生のこの時期の安心・安定が、学年を超えても続いていく」という推進地区の報告もあります。入学当初になかよしタイムを積極的に位置付ける効果は大きいと考えます。

事例　なかよし①　「なかよしいっぱいだいさくせん」～ともだちづくりゲーム～

みんなで一緒に歌ったり踊ったりして楽しさを感じた子どもたち。友達と関わる楽しさを、さらに感じてほしいと願い、「１年生になったら」「学校探検に行こうよ」などで「友達づくりゲーム」をしました。最初は表情が硬く自分から友達を誘えなかったＡさんも、ゲームを繰り返す中で、表情が和らぎ、自分から友達に声をかけ、笑顔でゲームを楽しんでいる様子が伝わってきました。

ゲームを終えた子どもたちは、「Ｂさんとお話ししたよ」「お友達になって手をつないだよ」「もっとお話ししたかったな」「全員とできるまでやりたいな」と、友達との関わりをさらに広げていきたいという思いが生まれてきたようです。

この後、子どもたちは、「自分の名前や自分の好きなことを知らせたい」という思いが膨らみ、自己紹介カードを作りました。「友達づくりゲームパート２」として、ゲームで同じチームになった人同士でカードを渡して自己紹介し合いました。

各教科等の目標を考慮することで、各教科等の時間として運用できる活動例

- **手遊び歌**
- **歌でなかよし**
- **どんなお話かな**（読み聞かせ）
- **エプロンシアター**
- **パネルシアター**
- **クイズ**
  （私は誰でしょう？　これは何でしょう？）
- **コミュニケーションツールとしてのゲーム**
  - ・挨拶ゲーム
  - ・握手ゲーム
  - ・どうぞよろしくゲーム
- **○○先生、こんにちは**
  （養護教諭、音楽専科、学校司書、・・・）
- **身体表現を使った歌・遊び**
  - ・鬼遊び
    （こおり鬼、手つなぎ鬼、ネコとネズミ）
  - ・じゃんけん遊び
    （じゃんけん列車、王様じゃんけん、積木じゃんけん、勝て勝てパワーじゃんけん）
  - ・わらべ歌
    （なべなべそこぬけ、おちゃらかほい、かごめかごめ、花いちもんめ）
  - ・リズム遊び
    （手拍子チームワーク、パチパチリレー、ウエーブをつなげよう、まねっこ行進）
  - ・動物歌合戦
  - ・シュート＆キャッチ

健康な心と体 → 体育科の学びへ

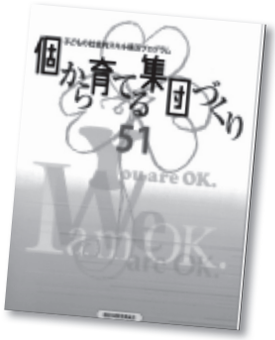
事例【なかよし②】 「ゆうぐであそぼう」（体育）

外遊びの時間は、園での遊びの経験を生かし、かけっこや遊具遊び、ボール遊び等、思い思いにやりたいことを楽しんでいます。鉄棒に集まった子どもたちは、「布団干し」「こうもり」と、次々に技を披露し合いました。園には鉄棒がなかったという子も、まねたり、教わったりしながら、何度も繰り返すうちに、いろいろな技ができるようになりました。

なかよしタイムの内容は、学校の状況や子どもの実態、子ども同士のつながりを見極めながら計画します。あらかじめ近隣の園から情報を得、子どもたちの知っている歌やお話などから始めるとよいでしょう。

計画に当たっては「子どもの社会的スキルを育てるための横浜プグラム　個から育てる集団づくり51」（横浜市教育委員会2010年３月発行・学研）を参考とし、「自分づくり」「仲間づくり」「集団づくり」の活動を組み合わせることで、子どもの安全や安心を保障し、望ましい人間関係を築いていくことが考えられます。

※「子どもの社会的スキルを育てるための横浜プログラム」についてはP35の解説参照



運用上の工夫

◆学年連携

なかよしタイムはクラスで行えますが、学年活動にすると、教師の役割を分担することができ、個々の子どもへの対応や配慮、支援がしやすくなります。子どもにとっては、仲間づくりのベースとしてクラスの枠を超えた活動が可能となり、人間関係の幅が広がるなどのメリットもあります。

◆協力体制

最初の１～２週間は、学校の体制として級外の教員を１年生に配置し、個々の子どもへの対応を丁寧に行い、安心感をもたせるようにしている学校もあります。また、ゲストティーチャーやボランティアなどの活用も有効です。子どもの様子や学校事情によって、活動する集団や形態を工夫していきます。

近隣の幼稚園や保育園の先生と一緒になかよしタイムを行う学校も増えてきています。

◆幼児期の学びを生かして教科等の学びにつなぐ

入学直後は、園で経験してきたことから活動を構成しますが、徐々に学習の要素を組み込んでいきます。例えば、各教科等の目標に迫ることができる活動をなかよしタイムで行ったり、その日のわくわくタイムやぐんぐんタイムのきっかけとなる活動をなかよしタイムに組み込んだりするなど、円滑に教科等の学習に移行できるようにします。そのためには、各教科等の目標をしっかりと把握した上で、今後の学習を見通し、活動を計画していくことが大切です。

わくわくタイム

生活科を中心とした体験的な活動を通して、各教科等と合科・関連を図り、主体的な学びをつくっていく時間

わくわくタイムでは、子どもが発見した不思議や疑問、活動の中で抱いた思いや願いを出発点として、学校探検や季節の遊び、植物栽培など、具体的な活動や体験を通して、各教科等との合科・関連を図り、問題解決的な学習を展開していきます。

単元例

1年 4月～7月

がっこうだいすき　わくわくたんけんたい

内容（1）学校と生活　（8）生活や出来事の伝え合い　（9）自分の成長

本ばっかりの部屋を見つけたよ！何のお部屋かな？

きっかけ　お母さんから、「お兄ちゃんは今日お休みだから、先生に届けて」って、お便りノートを頼まれたんだ。３年１組の部屋に行って、隣の部屋を見たら、本がいっぱいあったよ。

本ばっかりの部屋に行こう

道徳性・規範意識の芽生え　数量や図形標識や文字等への関心・感覚

事例　わくわく①

国語「なんていおうかな」　「ほんはともだち」
　　「どんなおはなしかな」「あさ」
道徳「みんながつかうもの」「あんぜんなせいかつ」

みんなで「本ばっかりの部屋」に行ってみることにしました。気を付けること、やった方がいいこと、やらない方がいいことを話し合って、出発です。

部屋をのぞくと、本当に本がいっぱい。いつもなかよしタイムで本を読んでくれる司書のA先生が、本の整理をしていました。「ここは何ていうお部屋ですか？」「先生は何をしているんですか？」「本を見てもいいですか？」と聞きたいこと、知りたいこと、やりたいことがどんどん出てきます。

A先生と図書館の使い方を話し合ってから、絵本を一冊読んでもらいました。「そらいろのたね」です。読み終わったA先生から問題が出されました。「本を書いた人の名前がここに書いてあります。中川李枝子さんが書いた本が他にもあるから探してね」。見つかったのは「ぐりとぐら」「いやいやえん」など、園で親しんできた本ばかり。Bさんが、「『あさ』もそう？」と聞きに来ました。国語の教科書の巻頭詩です。「その通り。すごい」と言うと、みんな口々に「あさ」を唱え始めました。さらに、A先生から「『さんぽ』も中川李枝子さんですよ」と聞いて、またびっくり。教室に戻って、みんなで「さんぽ」を歌いました。

【ルールを共有する】

図書館に行く廊下の歩き方や図書館での過ごし方、本の扱い方などを考え、話し合うことは、道徳「みんながつかうもの」と合科的・関連的に指導できます。子どもたちは、既に、さまざまな経験をしてきていますから、教師が一方的に教えるのではなく、話し合いによって確認したり、気付きを促したりします。

【教科等の学習につなげるための環境設定】

ここでは、国語「どんなおはなしかな」「ほんはともだち」を合科的・関連的に指導しようと考えました。

教室で教師が選んだ本を読み聞かせるのもよいですが、図書館という本がたくさんある場所で読む方が意欲の高まりが期待されます。また、教科書で見た「あさ」のページに載っていた「なかがわりえこ」という名前が書かれた本を見つけたとか、なかよしタイムで聞いたお話の本があったとか、いつも園で読んでもらっていたお気に入りの本があったとか、ということであれば、ますます意欲は高まるはずです。子どもの目につくところに学習につながる本を置いておく、なかよしタイムで読む本を意図的に選んでおく、そんなちょっとした工夫が子どもの意欲につながります。

健康な心と体　社会生活との関わり　言葉による伝え合い

事例　わくわく②　「せっけんがないけど…」

トイレの後、石鹸で手を洗おうとして液体石鹸の入れ物が空であることに気が付いたＣさん。話を聞いた担任は、みんなに伝えるよう促しました。「家にあるから持ってこようか？」「お店で買えば？」と話し合う中で、Ｄさんが「誰か、石鹸を入れていたけど・・・」とつぶやきました。

次の日の中休み、学校中の手洗い場には、石鹸を入れに来るのを待つ子どもたちの姿がありました。やがて、６年生が石鹸を持ってやってきました。石鹸を入れる様子を観察し、インタビューもしました。６年生は保健委員の仕事として石鹸を入れていたということや、保健室から石鹸を持ってきたこと、保健室は体重を計った部屋だということもわかりました。教室に戻って、それぞれにわかったことを伝え合うと、今度は「保健室に行きたい」「委員会って何だろう」など、やりたいことや知りたいことが出てきました。聞きたいことをまとめ、養護教諭のＥ先生にお願いに行きました。

次の日、保健室を探検し、Ｅ先生から「石鹸を入れてみる？」と特別に仕事をもらいました。子どもたちは６年生に教わりながら、学校中の流し場の石鹸を補充しました。自分たちで問題を解決できた、役に立った、という達成感で大満足の子どもたちでした。

【気付きを共有し、問題解決につなげる】

入学して間もないこの時期、新たな環境で見つけたことや不思議に思ったことなどの気付きを大切にしながら展開していきます。子どもの日常をよく見つめ、小さな問題をやり過ごさずに共感的に取り上げ、みんなで問題解決していく過程を楽しんだり、解決の達成感を味わったりするとともに、活動の仕方を学び、次の問題解決や他教科等での学びに生かせるようにしていきます。

他の部屋にも行きたいな。

ぼくは、いつもオルガンを弾いてくれる先生に会いに行きたい。

自分が行きたいところに行こうよ。

わくわくたんけんに行こう

給食室　栄養士の○○先生

給食は誰が作っているのかな？

先生じゃないの？

保育園は給食の先生がいたよ。

校長先生

校長先生は、ここでどんなお仕事をしているんですか？

事例　わくわく③

数量や図形、標識や文字等への関心・感覚

→ 算数
「なかまづくりとかず」

階段を上った所に「２」と書いてあるのを見つけたＦさんは、そのことをカードにかきました。それを全体化し、「何でかな？」と聞くと、「２階だからかな？」「２年生のお部屋だからかな」「本当かな？」「調べてみよう」と課題ができました。

そして、「３階に行ったら３と書いてあるはず」と類推し、「やっぱり！」「４階は４だった」と、見つけたことに大喜びでした。その後は、「２を書いてみよう」「２つのものを集めよう」といった算数の学習につながりました。

【他教科等と合科･関連を図る】

探検で見つけた数字を書いたり、数字を使って遊びを考えたり、図書館の本が仲間同士で分類されていることに気付いたり、見たい本が置いてある場所を言葉で示したりといったことは、算数「なかまづくりとかず」や「なんばんめ」につながります。子どもの生活の中から学びの種を見つけて学習に結びつけていくことが、主体的な学びにつながります。「教科書を開きましょう。今日は『２』を勉強しますよ」と言って、教師主導で学習を展開するよりもずっと必要感のある学びになっていくはずです。

事例　わくわく④

音楽室 ○○先生

道徳性・規範意識の芽生え

豊かな感性と表現

→ 音楽「こえをあわせてうたおう」
「おとあそびをしよう」

音楽室では、６年生が合奏の練習をしていました。園で使ったことのある楽器もあれば、初めて見る楽器もあります。６年生が演奏するのを見ているうちにさわってみたいと思いましたが、探検にはルールがあります。「勉強をしている邪魔をしないこと」「部屋にあるものを勝手にさわらないこと」などは、みんなで考えた「わくわくたんけん」の約束です。６年生にアドバイスをしているのは、いつもなかよしタイムで一緒に歌を歌ったり、伴奏をしてくれたりするＧ先生でした。隅の方で見ていると、「ちょっとだけやってみる？」と、特別にさわらせてもらうことができました。

教室に戻ってみんなに報告すると、「ぼくもやりたい」「わたしも」と大騒ぎ。休み時間になるのを待って、ＨさんとＩさんが代表で「楽器をさわらせてください」とお願いに行きました。Ｇ先生は、「楽器を大切にしてくれるならいいですよ」と、快く聞き入れてくれました。音楽室で授業がない時間に、Ｇ先生と音楽室で勉強できることになったのです。

次の日、子どもたちはＧ先生と一緒に音楽を楽しみました。担任は、Ｇ先生と事前に打ち合わせをし、音楽科の目標も達成できるよう授業のＴ$_1$をお願いしました。子どもたちは、いろいろな楽器を見つけては音を鳴らしてみたり、音楽室を探検したり、Ｇ先生と歌ったり、リズム遊びをしたりして、大満足でした。

【振り返りを大切にし、表現活動を充実させる】

探検で見つけたことや気付いたこと、聞いたこと、調べたこと、わかったことなどは、カードに記入するなどして、振り返りができるようにします。表現したり、伝え合ったりする活動を通して、自他を認め合う気持ちを育んでいきます。カードは、掲示することで、気付きを共有化でき、興味や関心が持続します。隣同士やグループなどで伝え合う時間をつくることも大切です。

表現する際には、「話す・聞く」「書く・読む」「絵に描く」「写真にする」など、多様な方法を組み合わせます。

数量や図形 標識や文字等への関心・感覚　言葉による伝え合い　豊かな感性と表現

事例　わくわく⑤

⇔ 国語･特別活動「どうぞよろしく」
⇔ 図工「『じぶんマーク』で みんなともだち」

探検を通して、自分たちを支えてくれる人々の存在に気付いた子どもたち。自分の名前を正しく書く学習を基に、名刺を作って渡そうと考えました。

名刺は二種類。一つはノート大の「大きな名刺」。自分の名前を大きく丁寧に書き、その回りに、好きなものや得意なことなど、相手に覚えてほしいことを絵に描きました。もう一つは、普通の名刺サイズの「小さい名刺」。ここには、自分の名前と「じぶんマーク」を描きました。「じぶんマーク」は、自分だけのマークです。ロッカーや靴箱、教科書やノートにも付けています。「小さい名刺」は、相手に渡すものなので、心を込めて作りました。

名刺を渡したい相手には、まず大きい名刺を見せながら自己紹介。自分のことを話します。小さい名刺を渡して、相手のことも聞きます。相手が名刺を持っていない時は、大きい名刺の裏に名前を書いてもらいました。この活動を「どうぞよろしく」と呼ぶことにして、まずは、なかよしタイムで学年の友達と「どうぞよろしく」。自信がついたところで、探検で出会った人と「どうぞよろしく」。探検に行くときは、忘れずに名刺を持っていくようになりました。

運用上の工夫

◆規範意識・道徳

学校のルールや人との接し方など、社会生活に必要なスキル等を身に付けることはとても大切です。学校探検に出かける前には「探検の約束」を話し合い、職員室への入り方や、鍵の借り方などを理解します。「お兄ちゃんの連絡帳を届けようとしたけれど、なんて言ったらいいからわからなかった」などの場面やつぶやきを捉えて困り感を共有するとよいでしょう。また、探検先で出会う職員や上級生などへの接し方を学ぶことも大切な学習です。探検の後には振り返りの時間を設け、自分たちの行動を見つめ直したり、道徳の時間で、関連する題材を学習したりすることで、効果的に規範意識や道徳性を高めていきます。

◆人との出会い

子どもは探検を通して、学校は色々な人によって支えられていることを理解していきます。保健室では保健室の先生、音楽室では音楽の先生、図書館では司書の先生、給食室では栄養士さんや調理員さん、用務員室では用務員さんなど、多くの大人と出会うことで、自分の興味や関心を広げていきます。理科支援員さんに出会った子どもが理科室を気に入り、１年間断続的に通ってミニ実験を体験させてもらったり、司書の先生と仲よくなった子どもは、司書の先生の読み聞かせのファンになり、それをきっかけに本好きになったりといったエピソードは、理科の学びや国語の学びにもつながるものです。色々な人との出会いを通して、自分の好きなことや得意なことを見つけ、自らの可能性を伸ばしていく姿は、子どもの多様性を生かし、学びをより豊かにすることにつながります。

ぐんぐんタイム

教科等の学習に徐々に移行し、教科等特有の見方・考え方を身に付けていく時間

入学した子どもたちが、主体的に自己発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことができるよう、幼児期における遊びを通した総合的な学びを生かし、円滑に各教科等の学習へとつながるようにします。そのために、普段の生活の中やなかよしタイムやわくわくタイムで体験したことから生まれた思いや願いをきっかけとして学習をスタートさせたり、遊びや探検の中で見つけたものや人、事象などを学習材として学習を展開したりしていきます。

学習例

協同性　数量や図形標識や文字等への関心・感覚 → 国語科の学びへ

事例　ぐんぐん①

「どんなおはなしかな」

→ 国語「なにがはいるかなゲーム」「ひらがなとなかよし」

○ちごに　みるくを
○っぱい　○れて
○ますぐ食べると
○いだす　おうさま

なかよしタイムで「あいうえおうさま」*1を読んでもらってから、文字あてゲームをし、その文字を書くことが、毎日の定番になりました。黒板に虫食いの文章が出たらゲームスタート。○に入る文字を考え、グループで話し合います。ストップの合図で、それぞれのグループから答えを出し合い、「あいうえおうさま」で確認します。

正解が出たら音読。みんなで声を合わせて読んだり、お隣さんと交互に読んだり、一人で何度も繰り返し読んで暗唱したり・・・。「今日は、『い』を丁寧に書こう」と、文字練習にも意欲的に取り組んでいます。書けるようになったら、今度は「い」のつく言葉を考えます。まだ文字が全部書けるわけではないので、絵をかいてメモにする子もいます。グループ対抗で行うゲームは、友達と力を合わせて取り組むことから、コミュニケーション力が高まり、協同性も育まれます。

健康な心と体　協同性 → 体育科の学びへ

事例　ぐんぐん②

どんなおはなしかな「ぐりとぐら」→ 体育「おにあそび」

今日の体育は、「ネコとネズミ」を「ぐりとぐら」*2にかえて、チーム対抗鬼遊びです。教師の「ぐ、ぐ、ぐ、ぐり！」の声を聞いて、「ぐりチーム」は「ぐらチーム」を追いかけます。「ぐらチーム」は、まっすぐ走って陣地のラインまで逃げます。ラインにたどり着く前にタッチされたら相手チームの仲間になるので、帽子の色が替わります。「ぐ、ぐ、ぐ、ぐら！」なら、その反対。ランダムに繰り返して、人数が多い方のチームの勝ちです。「ネコとネズミ」は、園によって少しずつルールが違っていたり、知らない子がいたりしたので、みんなで話し合ってルールを決め直しました。

教師が「ぐ、ぐ、ぐ、グラタン！」と言ってフライングを誘いました。すると、「今度は『グリル』って言って」とAさん。それを聞いたBさんが「『グラス』は？」と言いに来ました。みんなに紹介すると、「ぐり」と「ぐら」のつく言葉集めが始まりました。いつフライングの言葉が出るか集中し、楽しみながらの鬼遊びになりました。

言葉による伝え合い　豊かな感性と表現 → 図工科の学びへ

事例　ぐんぐん③

どんなおはなしかな「からすのパンやさん」

→ 図工「みてみて、いっぱいつくったよ」

なかよしタイムで、「からすのパンやさん」*3を聞いた子どもたち。からすのパンやさんがつくったいろいろなパンを見て、みんな「いろいろなパンをつくりたい」と意欲満々。「じゃあ、粘土でいろいろなパンをつくって、からすのパンやさんをお手伝いしよう」と投げかけました。

本に描かれたパンを再現しようとする子や自分で考えた新たなパンをつくり出す子、次々にたくさんつくる子や一つのパンをじっくりつくる子、友達と相談しながらつくる子など、その取組も様々です。「ランドセルパン」「鉛筆パン」「机パン」など、１年生ならではの楽しいパンが続々とできあがりました。お話から想像を働かせて創作活動をすることで、「表現することを楽しむ」という図工の目標が達成できるようにしていきました。

パンができたら、今度は「からすのパンやさんごっこ」が始まりました。子どもたちは、「ごっこ遊び」も大好きです。「このパンは、何ですか？」「何か当ててください」こんなやりとりをしながら、楽しい活動になりました。

数量や図形標識や文字等への関心・感覚 → 算数科の学びへ

事例　ぐんぐん④

積み木じゃんけん→ 算数「いくつといくつ」

今日のなかよしタイムは「積み木じゃんけん」。積み木を５本ずつ持ったら、相手を探して「じゃんけんぽん！」。勝ったら相手から１本もらい、負けたら１本渡します。何度か繰り返し、終わりの合図で席に戻り、持っている積み木の数を数えます。５本より多ければ勝ち。少なければ負けです。毎日やっていると、「今日は２本勝った」「昨日は２本負けたけど、今日３本勝ったから、併わせると１本勝ちだよ」と言う子も出てきます。

５月。算数「いくつといくつ」の学習は、４月になかよしタイムでやっていた「積み木じゃんけん」から始めました。友達と積み木じゃんけんをした後、持っている積み木の数だけワークシートの○を赤く塗ります。○は10個あるので、あといくつで10になるのかを数えて右の□に数字を書きます。何度か繰り返すと、数えなくても10になる補数が分かってきました。

慣れてきたので、積み木から算数ブロックに換えました。色を塗らなくても、表裏をひっくり返すだけで、一目で補数が分かります。遊び感覚で、楽しみながら数量感覚を身に付けていきました。

*1 参考　「あいうえおうさま」　寺村輝夫 著　理論社　1979年
*2 参考　「ぐりとぐら」　なかがわりえこ 著　福音館書店　1967年
*3 参考　「からすのパンやさん」　かこさとし 著　偕成社　1973年

数量や図形
標識や文字等への
関心・感覚
→ 国語科の学びへ

事例　ぐんぐん⑤

どんなおはなしかな「あいうえおうさま」

→ 国語「うたにあわせてあいうえお」「ことばをあつめよう」

なかよしタイムで、司書の先生に「あいうえおうさま」*1を読んでもらってから、図書館で本を借りる方法を教えてもらい、しばらく教室に置くことができました。園で読んだという子も多く、たちまち人気の一冊になりました。

ある日、Ｃさんが教科書の「うたにあわせてあいうえお」を見つけて、「『あいうえおうさま』に似てる」とつぶやきました。黒板に書き出すと、みんな口々に唱え始めました。「あ、そうか！」「分かった！」「そういうことか！」

次の日の朝、Dさんが、「私つくったよ」と言って教えてくれたのが、「ありさん　あいさつ　あいうえお」でした。みんなに紹介するように促すと、恥ずかしそうに、でもはっきりした声で発表することができました。みんなから「すごい！」と拍手をもらい、うれしそうでした。Dさんから、「作りたい文字の言葉をいっぱい考えて、組み合わせるとできるよ」と聞いた子どもたちは、今度は言葉集めに夢中になりました。

運用上の工夫

◆自己肯定感を高める

なかよしタイムで得た安心や自信が、ぐんぐんタイムにも生かされるように工夫します。子どもが「わかる」課題や「できる」課題から始めて、自信をもって取り組み、徐々に、考えたり、工夫したり、相談したり、協力したりする課題へと発展するようにします。幼児期の遊びで身に付けた集中力や試行錯誤する力が発揮されることを期待し、できたら認め、達成感や充実感を得られるようにします。「がんばればできる」という学習への自信や自己肯定感をこの時期に獲得することは、６年間の入口として、非常に重要になります。

◆必要感のある学びをつくる

この時期の子どもたちは、お話の世界に入り込み、登場人物になりきったり、同じ目線で物事を捉えたりします。「事例　ぐんぐん③」では、お話の世界に浸りながら、「からすのパンやさんみたいに、いろいろなパンをつくりたい」と気持ちを膨らませてから粘土と向き合うようにしました。「パン屋さんをお手伝いする」という目的で、粘土を使った表現活動に必要感をもったことで意欲は高まりました。

「２」という数字を見つけたことをきっかけに数の学習をする、オタマジャクシを見つけた子が「『おたまじゃくし』ってどう書くの？」と言ったことをきっかけに拗音の学習をするなど、子どものつぶやきや姿から学習につなげていきます。

◆安全への配慮

体育や図工、生活、特別活動（行事、集会、給食、清掃他）など、安全への配慮が必要な教科等については、学びの約束やルールを早い時期に定着させる必要があります。指導する際には、教師が一方的に伝えるのではなく、園での経験を引き出しながら、なぜそうした約束やルールが必要なのかを自分たちで考え、納得した上で活動するようにします。

5　スタートカリキュラムの改善

スタートカリキュラムは、他の教育活動と同じように、子どもの姿をしっかり見とり、ねらいに沿った子どもの姿が表れているかどうかを見直しや改善しながら進めていくことが重要です。また、年度によって、あるいはクラスによって子どもの実態が違うことから、子どもに即した柔軟な計画を心がけ、運用していくことが求められます。柔軟な対応は、合科・関連する教科等の内容、時数、配列、時期、指導過程等において具体的に行われていくことが大切です。

改善事例　手ごたえを力に～スタートカリキュラムを充実させるために～

昨年度交流した年長児の入学を迎えるにあたって、本校のスタートカリキュラムの見直しを図ることにしました。これまでも、入学時の不安を和らげるように、学年で統一したルールや掲示物の工夫などは行ってきましたが、園との交流を通して見えてきたことを、より多く取り入れ、子どもの安心につなげることができるよう工夫して取り組むことにしました。

改善１　保育士による読み聞かせ

入学間もない時期、それぞれのクラスに連携している園の保育士に来てもらい、絵本の読み聞かせやパネルシアターをしてもらいました。

エプロン姿の保育士が教室に入ってくると、１年生の子どもたちの表情が柔らかい笑顔となり、安心している様子がはっきりと分かりました。また、今年度１年生の担任となった先生たちも、保育士の語りかけ方や本の読み方などに教えられることも多くありました。

改善２　グループ机での学習

これまでは入学準備の段階から、１年生の教室の机は出席番号順に名前のシールを貼り、全員前に向けて並べていました。そしてそのままの状態で１日を過ごし、給食の時に初めてグループで向き合う配置にしていました。今年度は、入学式後の日常の活動を、４人ずつ向き合う「グループ机」の配置で行うことにしました。園のテーブルと同じように座ることで、安心感がもてると考えたからです。

子どもたちの会話が自然に生まれたり、お互いに友達がしていることを見ることで自分も安心して取り組めたりと、全員が前を向いている座席の配置では見られなかった効果が感じられました。

改善３　『なかよしタイム』のよさの共有

保育士の関わり方から学んだり、スタートカリキュラムの実際を公開授業研究会で見たりしたことから、担任が積極的に園での経験を生かした活動を取り入れるようになりました。「手遊び歌をしてから学習を始めると、子どもが自然に学習に入ることができるのが分かりました」といった言葉が担任から聞かれ、「なかよしタイム」が確かに子どもの安心につながるのだという職員の共通理解が生まれました。

コラム　9年間の積み重ね～スタートカリキュラムで子どもに育まれたもの～

1　9年間に積み上げてきた取組

本校では、平成21年度からスタートカリキュラムの取組を始めました。多くの学校で見られるように、本校においても集団不適応行動や不登校という問題が当時目立ち始めていました。原因に園での生活と小学校生活のギャップから生まれる不安感や発達特性が考えられました。その解決の一助として始まったスタートカリキュラム。今年で９年間継続したことになりますが、取組の成果として確実に集団不適応・不登校は減少し、子どもの生きる力に波及している手応えを感じています。

（1）それは入学前から始まっている

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、その育ちを小学校の学びに滑らかに接続していけるよう、学校としてカリキュラム化し様々な職員が年間を通して連携を図り引き継いでいます。

①年間を通した園・小学校交流

「お花交流会」「給食交流会」など、近隣園児を招待して、一緒に花の種を植えたり給食を食べたりし、園児に１年生への憧れを感じてもらうとともに小学校という環境に馴染んでもらうようにしています。その際、年間を通して同じ交流ペアで活動し、名前で呼び合える関係をつくっていきます。

②園訪問

児童支援専任教諭と校長は次年度入学してくる子どものいる園を年度後半に訪問し、園の環境や方針、当該児のよさや課題、配慮の必要な点などを、直接見て聞いて把握します。学級編制を行う際の大事な資料となります。

③体験授業教室

２月に行う入学説明会。保護者が説明会に出席している間、新１年生を暫定的にクラス分けし、様々な遊びを行います。子どもの特性が顕著に現れ、児童理解の一助になります。

④新1学年担任研修

春季休業中に新1年担任は、幼稚園の先生から子どもたちの好きな遊びや歌を教えてもらう研修会を行います。子どもの心をつかむ活動や遊びを知ることは重要です。

（2）入学直後・ひたすら遊ぶ・遊びの中にある「学びの芽」

「アチャー！」「ツルン！」春の朝、１年生の教室には楽しくダンスやゲームに浸る元気な声が響いています。子どもたちは、粘土や積木など、園で慣れ親しんだ遊びや、外遊びに夢中になり、次から次へと活動を展開します。入学当初、新しい仲間と遊ぶなかよしタイムは、子どもの主体性を育む大事な時間と捉え、教育課程に位置付けています。遊びに満足すると、子どもたちはしっかり先生や友達の話に集中します。読み聞かせしてもらった絵本が楽しくて、今度は自分で読みたくなりひらがなを覚えたいと主体的な学習意欲が育まれてきます。入学前の生活とよく似た活動をすることで、安心感が生まれ、小学校生活に多くの子どもが滑らかに馴染めるようにしています。

2　子どもに育まれてきたもの

（1）1年生の学び

入学前に育ってきた姿を生き生きと発揮できるようになった子どもたち。教師はその学びの芽を丁寧な寄り添いや見とりから、生活科やその他の教科学習につないでいきます。

単に、安心できる小学校生活のスタートにより、集団不適応行動を回避するということがゴールではなく、学びの芽生えを自覚的な学びにつなげていくことが大切です。そのような意味から、１年生では生活科の学習で、子どもが体全体で身近な環境に直接働きかける活動を大切にします。身近な環境とは、自然・人・社会など子どもをとりまく様々な対象です。「不思議だな」「すごいな」といった子どもの気持ちに教師はとことん寄り添って、共に楽しんでいきます。繰り返し対象と関わる中で、気付きの質が高まり、子どもの中でたくましく生きていく力へと育まれていきます。

（2）その後の子どもの育ちにとって

スタートカリキュラムを経験した子どもたちは、どのように成長していくのでしょうか。

〈主体的問題解決力〉

繰り返し対象に働きかけ体験したことから生まれる、自分の気付きや問題意識。それらをもとに学びを紡ぎ出す楽しさは、子どもたちの中に脈々とつながっています。３年生以上の総合的な学習の時間において、その力は花開いています。ある実践から考えます。

生活科で人との関わりを豊かにもち、自分を支えてくれる人々の存在に親しみをもってきた子どもたちが４年生になった時、昔遊びパフォーマーの単元を立ち上げました。自分たちが楽しむだけでなく、人に見せて喜ばれたい、笑顔になってほしいと願いをもちました。主体的に他者と関わり、問題を見出しながら学びを創っていく姿がそこには見られます。子どもたちは、自分の育った幼稚園や保育園で昔遊びパフォーマンスを展開し、続けて園児にこまやけん玉の遊び方を一生懸命、根気よく教えてあげました。自分たちの活動が園児に喜ばれ、その後、園児が昔遊びに夢中になっていること。また、園児にとって、自分たちは憧れの存在になっていることを知りました。「こんなに喜んでもらえている。嬉しい」という思いをふくらませ、自己有用感は大きく高まっていきました。スタートカリキュラムを経験して成長した彼らのなかに、「安心」と「主体性」「協働性」の育ちがあったと考えられます。

3　学校づくりにとって

このように、小学校６年間を通して、体験を通して学ぶという授業観・学習観を子どもと教師が共有できていることを実感します。３年生以上の学習においても、体験を通して得た思いや願いを共有し高め合いながら学ぶ姿がよく見られます。

スタートカリキュラムは、入学してきた子どもの多様な姿をまるごと受け止め、小学校生活の中で存分にその力を発揮できるように支えていく取組です。園で進めるアプローチカリキュラムと呼応するかたちで、二つのカリキュラムが幼保小を連結させる役割をしていきます。児童支援専任教諭や低学年担当者だけでなく、全職員で６年間の育ちを同じ視点で共有し、小学校生活に続く中学校とも連なり、一貫していくことが望ましいと考えます。子どもの育ちに関わる、幼保小中のつながりが、学校づくりにとっても、今後非常に重要になると考えます。